安重根顕彰碑探索
―その教材的意義を中心に―

中川浩一*
趙珍淑**

筆者の一人である中川の場合について言えば，安重根（アン・ジュングン，一八七九―一九一〇）への関心を高めるきっかけになった存在は，「朝日」一九七九（昭和五十四）年十二月十二日付けの紙面を飾った「安重根の遺墨故国へ」と題する記事であった。

それまでの時点で，安重根の存在を心にとめていたかどうかについても，いまになっては記憶がない。国民学校初等科当時に習った「国史」で教えられた記憶はなく，中学校四年（旧制）と高校二年で二度も習った「日本史」でも，安重根による伊藤博文「暗殺」は，扱われなかった様に思うのである。

十六年間も勤務し，社会科を担当した東京教育大学附属中学校では，地理的分野の担当で，π型並行学習であったから，歴史的分野は谷口五男（故人），横山十四男（現・東京家政学院大学教授）にお願いし続けていた。いわゆる朝鮮地誌では，近代史をふまえて地誌を学習すべきであるとの信念から，日韓併合以来の侵略と抵抗運動について，文書資料を作成のうえ，具体的に言及したし，教材研究の過程で，三・一独立運動もとりあげていた。(1)

けれどもこの時点では，韓国植民地化が第二次日韓協約に始まるとの認識を欠いていたため，安重根による伊藤博文射殺の史実を，心にとめる余地がなかったのである。

安重根義士記念館の前庭に銅像が建つ

韓国に「義士」安重根を顕彰する記念碑がいくつあるかを筆者は知り得ない。安重根の生地は，黄海道海州府首陽山下と自伝の『安應七歴史』に記されている由だが，その地は朝鮮民主主義人民共和国の領域ゆえ，出生記念の碑の有無を確かめる手だてを私は持ちえない。

ソウル市内の南山に設けられた安重根義士記念館の前庭に建つ銅像については，生誕百年記念式典を詳細に報じた「朝日」一九七九（昭和五十四）年九月十日付の記事，「伊藤博文暗殺の安重根―生誕一〇〇年祝う韓国の心」によって，知識を得ていたのである。

ところで，安重根義士記念館は，ソウル市民の募金により，一九七〇（昭和四十五）年に開設されたとされている。(2) けれども，筆者の一人である中川が一九七六年に，初めてソウルへ旅したときには，『交通公社の海外ガイド』は，南山中腹に点在する諸施設を列挙したにもかかわらず，安重根義士記念館の存在は無視したし，ソウル市内見学につきそったガイドの女性も，安重根については一切ふれなかった。

近刊のＪＴＢポケットガイド『韓国』（一九九二年）でも，その存在には言及するが，具体的な内容に関する記述は行わない。

これに対して，井上秀雄・江坂輝弥・山口修・李進熙『韓国の歴史

茨城大学教育学部紀要（人文・社会科学，芸術）四四号（一九九五）一五―二六

散歩』（一九九一年・山川出版社）は，ソウルの章に「安重根義士記念館」の項を特設し，具体的な解説を行った。けれども，“日本にとっては殺人犯だが，韓国においては憂国の義士”“単なるテロリストではなく”と記述して，消極的な評価にとどめている事実が読みとれる。「まえがき」によると，“通史および近世・近代史に関しては，山口が担当”“李は全体の構成にあたったほか，全般にわたって執筆を分担した”書物という事実に注目しよう。山口修は仏教大学教授，李進熙は，在日朝鮮人として朝鮮人学校で教鞭をとった履歴もあるほか，(3) 広開土王（好太王）碑文をめぐって毀誉褒貶はなはだしい人物という事実に注意しよう。

「射殺」と表現する教科書もある最近の情勢

『韓国の歴史散歩』がいみじくも指摘した様に，一九〇九年十月二十六日，ハルビン駅のプラットホームで伊藤博文を狙撃した安重根は，長く暗殺犯，テロリストの扱いを受けてきた。在日朝鮮人（？）を共著者の一人とする書物でさえそうなのだから，他は推して知るべしといって良い様に思われる。(4) とはいえ，日本においても，安重根に対する評価は，序々にではあっても変っているといわねばならず，その頂点に位置するのが，宮城県栗原郡若柳町大林に座を占める曹洞宗大林寺の境内に建つ顕彰碑と一九八一年以来，毎年九月初旬に行われ，昨年で第十四回を数えた「安重根義士並びに千葉十七夫妻の追悼法要」と解される。だがそのことについて，具体的に言及する前に，学校教育の場においても，安重根に対する評価が，確実に変化しつつある事実を，指摘する必要があるだろう。その具体的な事例として，教科書での取り扱いを，次にみておきたい。

公教育において，主たる教材に位置づけられる教科書は，平成元年に告示された「学習指導要領」によって，新編修本に全て改められている。そうして，中学校においては，平成5年度から，八種類の社会科教科書が登場した。

ところで，安重根にかかわる記述は，一九〇五（明治三十八）年に締結され，韓国の保護国化を強制した「第二次日韓協約」との関連でなされている。とはいえ，八社のうち二社は言及しておらず，採択部数が第一位の東京書籍の刊行本での記述がない点も無視できない。だが，安重根の行動に言及した六社の刊行本の記述が，「暗殺」「射殺」それぞれ三冊ずつであった事実は，注目に値する。(5)

一九七九年以来，安重根にかかわる記事を多方面から積極的に掲載してきた「朝日」が，最近の事例でも“伊藤博文を暗殺した朝鮮人，安重根”と記載するのとそれは対照的である様に思われる。(6)

日本国内にも安重根顕彰碑が存在する

筆者の一人である中川が，安重根顕彰碑が建つ大林寺をいつか訪ねてみようと思ったのは，一九九二（平成四）年九月七日付の「朝日」が，前記の合同法要に参列するため，安重根の甥と孫（女性）が来日し，大林寺境内にある千葉十七夫妻の墓にも詣でたとの記事が掲載されたからである。この記事は，安重根が伊藤博文射殺者として収容されていた関東都督府旅順刑務所に，看守として勤務していた憲兵上等兵千葉十七の秘蔵した「安重根絶筆の書」に由来する顕彰碑の存在も併せ報じていた。(7)

大林寺を訪ねてみようという気持が一層強まったのは，一九九四年一月十七日付の「朝日」が，韓国からの墓参団四十一人が大林寺を訪れたこと，さらに大林寺住職が，安重根と千葉十七の交流を画いた小説『わが心の安重根－千葉十七・合掌の生涯』を近く刊行すると報じたからである。

この書物に対する書評は，二月二十七日付の「朝日」読書欄に，大きなスペースをとって掲載された。評者は，朝日新聞社ヨーロッパ総局長を務めた経歴を持つ青木利夫であった。そうして，文末に収められた“小説に似て，流れるような文章が，実直な農民兵の回心を語るのに少し美しすぎる”との結論が，心の片隅にひっかかるものを残し，書店を介して注文をだすのをためらわしたと書かねばならない。これより，一年あまり前，同じ「朝日」の読書欄に掲載された佐木隆三『伊藤博文と安重根』（文藝春秋）姜在彦（カン・ジェオン，花園大学教授）書評を，とびつく思いで購入し，読了後，深い失望を味合っていたからである。書評には，“日本中心の一方的論断が横行するなかで，日韓双方からの複眼的アプローチによって新しい境地を切り拓いた作品として注目に値する”とあるけれども，読み終っても，安重根が伊藤博文射殺という非常手段をなぜとったか，その心の動きを読者に伝えるだけの内容を持ってはいなかった。今度も不見転買いをして，失望を味合いたくないと思ったのである。(8)

大林寺参道の脇に建つ顕彰碑

前夜は仙台に一泊し，栗原電鉄に乗車するため，東北本線の電車を石越駅で乗り捨てたのは，一九九四年七月三十日であった。大林寺は若柳町に位置すると新聞には書かれ，石越を起点とする栗原電鉄の二つ目の駅が若柳であると知っていたからである。

若柳の駅舎をでて，駅前広場に足を踏みだしたが，期待していた施設所在地の案内板はみあたらない。やむを得ず駅に戻り，出札口でたずねてみると，若柳町内には違いないが，所在地は二駅先の大岡下車であるという。次の電車まで一時間あまり待たねばならぬのかという思いが脳をかすめたとき，右手の道を少し歩くと，タクシー乗り場があるから，それを利用したらどうかとのアドバイスを受けた。

タクシーは市街地をはずれて迫川左岸の堤防を上流に向って走りだし，やがて前方に東北新幹線の高架橋がみえてくる。高架橋の下を抜けると，車はすぐに右折して堤防を降りた。すぐその先に，寺域が広っていた。ここが大林寺ですとの案内でメーターをみると，若柳から一一〇〇円であった。正面に本堂，そして左手一帯に墓地が広っている。千葉十七夫妻にゆかりの顕彰碑と記事にはあったから，碑は千葉十七夫妻の墓の脇に建つのだろうと一人合点し，それほど広くはない墓地ゆえに，少していねいに探せばみつかるだろうと思い，住職をわずらわすまでもないと考えてみた。数年来手がけてきた「秩父事件」の記念碑も，全て独自に探しあてたからである。

だが墓地の中には，記念碑らしいものが見当たらない。加えて，千葉十七夫妻の墓もどこにあるのか見当がつかなかった。庫裡にたち寄って，顕彰碑の所在をたずねるほかあるまいと考え，墓地を離れて本堂前に戻ったところ，全く思いがけず，参道の右手に「為國献身軍人本分」と大書し，左脇に「庚戌三月　於旅順獄中　大韓國人　安重根謹拝」と記し，左手薬指先端を血盟締結で切断したという特徴ある手形も収められる記念碑が建っているのに気づかされた。

これが，死刑施行の直前，看守で憲兵上等兵だった千葉十七に，安

重根が書き残し，遺族が韓国に返還したと報じられる遺墨にかかわる記念碑だったのである。

宮城県知事の署名による顕彰文

裏面には建碑の由来や，建立年代か建立者名が刻字されている筈と思い歩み寄ったところ，長文での由来が，横書きで収められていた。その全文を，次に転記しよう。(9)

国の褒亡をみたつて義兵を興し救国の英雄となった大韓義兵軍安重根参謀中将（一八七九－一九一〇）時に一九〇九（明治四二年）一〇月韓民族の主権を奪う日本の大陸侵攻の先鋒と見られた伊藤博文公は彼の手のもとハルビン駅頭に殉じた。

此の事件は日本にとっては痛ましき国家元勲の死であり韓国にとっては悲願とする民族保持への止むにやまれぬ義挙であった。相対立する此の現実の中で総督府陸軍憲兵の任にあった本郷出身（栗駒町）千葉十七氏（当時二七歳）は旅順獄中に囚の身となっていた安重根義士（当時三〇歳）を看守する役目にあった。

実直にして正義に厚き東北人の一人であった千葉氏の目に映った獄中の安義士の挙動は正に国の運命を憂い民族の独立と名誉を守るため身を捧げた清廉なる人格の士であり時に語る平和への高邁なる理念には強く胸を打たれた。義士を称える事が公然とできぬ当時の情勢にありながら千葉氏は義士に同情を禁じ得ず心ひそかに尊敬の念さえ抱くに至り出来得る限りの労を尽くして，やがて刑場に消えてゆくであろう其の身を惜んだ。

義士もまた，当時の日本人としては珍しい千葉氏の人間性あふれる知遇に応えて三月二六日死に赴く直前，軍人たる千葉氏にふさわしい一文を墨して贈った。曰く，

為國献身軍人本分（国のため身を献げるは軍人の本分なり）

千葉氏長じて帰郷の後も義士の遺影と墨書を仏壇に供え日々香を献げ冥福を祈りつ、世を去った。千葉夫妻の行える美挙は死後にも其の一族に強く訴えるところあり，幾多の困難にあいつつも千葉氏の意を汲み義士の遺墨を七〇年間に渡って大切に保管し続けた。

戦後新しく独立したアジアの友邦たる韓国の発展を冀いつつ一九七九年安重根義士生誕百周年の祝典を聞き意を決した三浦幸喜くに子夫妻ら千葉十七氏の遺族は東京韓国研究院を通して故国の首都ソウルに鎮座する安重根義士崇慕館に此の遺墨を供えた。

国にとって貴重なる遺品を其の国の国民に還したこの挙を記念し安重根義士並びに千葉十七氏の稀なる篤行を顕彰すべく日本の文化人，政治家，日本居住韓国人並びに宮城県の有志たちにより千葉氏の眠る若柳町大林寺に此の碑を建立した。

安義士の命日に際し日韓両国永遠の友好を記念して

一九八二年三月二六日　宮城県知事　山本壮一郎

本堂には安と千葉の祭壇がおかれる

碑の裏面にまわって顕彰文の筆写を始めたところ，かたわらを通りかかった住職斎藤泰彦師が，碑文を印刷した資料があるから庫裡にたち寄って下さいと声をかけられたので，突然の訪問で申し訳ないと思いながらも，好意に甘えて参上することにした。

安重根については，「朝日」に記事がでて以来，十数年も関心を持ち

大林寺墓地の千葉十七夫妻墓

大林寺参道脇に建つ安重根顕彰碑

大林寺本堂に特設される安重根，千葉十七夫妻祭壇

安重根，千葉十七夫妻第14回合同法要の情景

続け，韓国からも参詣する人があるとの報道に加え，顕彰碑があるとのことゆえ，一度訪ねてみたいと考え，不意にではあるけれどうかがってみたと話したところ，碑文の印刷資料に加えて，一九七九年以来の関係新聞記事のコピーも合せて提供して下さった。

斎藤住職は，早稲田大学文学部仏文科を卒業され，さらに駒沢大学大学院人文科学研究科修士課程を修了されている。朝日新聞記者を勤められた後，一九九〇年から大林寺住職の地位にある。研究者としての素養があり，また新聞記者としての長い体験が基礎になって，前記の著作が完成したのかと感じさせられた。

碑の建立には，先代住職も並々ならぬ寄与をされた由であるが，多くの記念碑が，建立に関係した人の名前を刻字するのに対し，個人名を一切ださぬ謙虚な態度には，心打たれるものがあった。宮城県知事は建立の当初から関係を持ったのではなく，募金が終り建碑の目途が建ち，碑文の草案もできた時点で協賛を依頼したところ，心よく応じられたのだという。

いろいろと話をうかがい，辞去する前に，安と千葉を一緒にまつる祭壇があるそうなので参拝させて頂きたいとお願いしたところ，本堂に案内して下さった。

仏像の前に，二人の遺影がおかれ，日々の供養を示す供花も眼に入る。すぐ左手の床の間には，「為國献身軍人本分」の掛軸が飾られ，その前には千葉十七未亡人の遺影も飾られていた。

住職夫人がマイカーで東北本線石越駅まで送って下さったのには恐縮したが，車中での談話から建碑をめぐっては「殺人犯」「テロリスト」の顕彰はけしからんとの非難も随分うけ，脅迫を伴う身の危険も過去にはあったけれど，現在は地域住民からも，理解を受けているとの述懐に，さもありなんの想いがした。

韓国人女性ガイドは伊藤博文を暗殺と表現

一九九四年八月二十日，ソウル滞在中の中川は，安重根義士記念館の前庭に建つ安重根の銅像を間近かにみることができた。中川にとっては，ソウル訪問は五回目になるけれども，前回までは国立中央博物館，景福宮の見学と市街のドライブやショッピングに時間を費していたのである。

今回は，安重根義士記念館の見学はぜひ行いたいと思い，ソウル市内の土地勘をつける目的で，大韓旅行社が主催するソウル半日見学ツアーにまず参加した。所要三時間で料金一八〇〇〇ウォン（約二二五〇円），マイクロバス利用で日本語，英語を話すガイドがそれぞれ同乗する。韓国人の参加者はいないらしく，韓国語での案内は行われなかった。

最初にでむくのは南山とのことゆえ，山頂までゆき，ソウルの都心を俯瞰する絶好の拠点というソウルタワーに案内するのかと思ったところ，意外にもバスが停車したのは，安重根義士記念館の前庭であった。皮肉なことに，記念館の敷地は，日本統治時代，朝鮮総督府が，天照大神と明治天皇を祭神として建立した朝鮮神宮の跡地である。

車外に私たちをつれだしたガイドは，安重根の銅像を指さして，一九〇九年に現在は中国に属するハルビンの駅頭で，初代韓国統監であった伊藤博文を，ピストルで暗殺した人物だが，韓国では民族の英雄とされていると説明した。

韓国人女性ガイドが，暗殺と表現したのは，全くオドロキであった。教科書問題が契機になって，韓国教育開発院が刊行した日本の中・高等学校社会科教科書に対する批判文書では，安重根の行為はテロリズムによるものではなく，義兵軍の将軍としての戦闘行為であり，「砲殺」

と表現した事実を知っていたからである。(10)

背広姿の安重根銅像が独立記念館前広場に建つ

安重根の銅像を間近かにみて，大変な誤解をこれまでしてきたことに，まず気付かされた。「朝日」一九七九年九月十日の記事には，“安重根が韓国旗をかざして進む姿の銅像が建てられ”と説明のうえ，左斜め下から写した写真も掲載されていた。写真が鮮明度を欠いていたのに加え，民族意識が強い国柄ゆえ，安重根が韓国古来の民族衣装に身を固め，大極旗（韓国国旗）を背おって歩む姿を想定したけれど，現物は右手に大極旗を持った背広姿の安重根が大股に歩む姿を像にしたものであった。

銅像の背後の石壁には，安重根の書や文書と思われる銘板が十枚も取り付けられている。銘板は，銅像を据えつける基礎の台座にも，二枚存在する。

銅像に向って右手には，自然石に安重根の書を刻んだ石碑が三つ建っている。その一つには，「國家安危勞心焦思」と刻まれており，同じ字句が，後述する独立記念館の第五展示館入口ホールに建つ安重根銅像の台座にも刻字されている事実に注意したい。

伊藤博文を暗殺と説明した女性ガイドに，韓国人が暗殺という日本語を使うのは不適当ではないかと言及し，日本でも「暗殺」ではなく「射殺」と表現する中学校の社会科教科書が三種類もあるくらいだからと理由づけを行ってみた。

だって，日本人からみれば殺人犯人でしょうとの反論に，最近の日本では安重根の行為に対する見直しがいろいろと行われており，安重根を対象とする法要が，今年で十四回目を迎えて近く実施されるくらいだからと説明したのである。(11)

時間の限られたバスツアーでの見学ゆえ，詳細は後刻改めての訪問で検証することにして，この時は写真を写すだけにとどめて，次の見学地に向はざるを得なかったのがくやまれる。それゆえ，銘板や記念碑の文面についての詳しい言及は，補遺の形で後日に改めて記すことにしたい。

独立記念館展示館内部に建つ安重根銅像

韓国旅行の七日目に，私はソウルの南およそ八五キロに位置する天安（チョンアン）郊外の独立記念館に足を運んでみた。日本の社会科教科書が，韓国侵略の事実をねじ曲げて記述しているとの批判（一九八二年の教科書問題）がきっかけになり，国民各層からの募金を原資に，一九八七年八月十五日にオープンした一大総合歴史博物館が，独立記念館であると解される。(12)

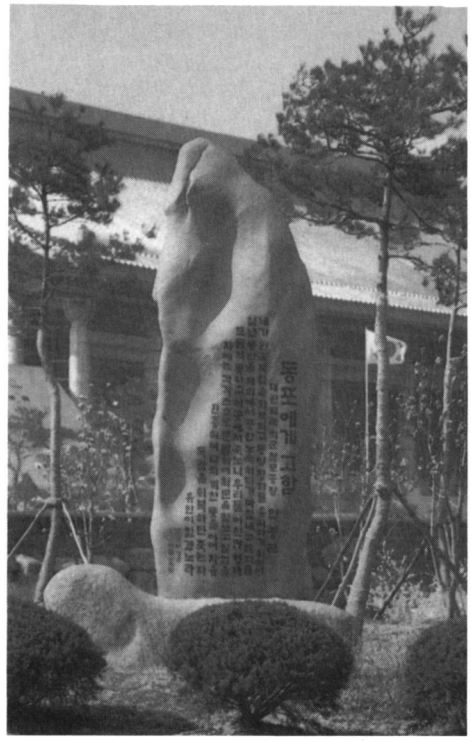
驚くほど広大な敷地に，天を突く形でそそりたつキョレー（民族）の塔が観客を迎え，大宮殿と見まちがうキョレーの家に驚かされた後に足をふみ入れる第一～七の展示館によって，旧石器時代に始まる韓民族の足どりを，現代に至るまで通観できる。主題は，度重なる外国の侵略に抗して，韓民族はどう対処し，独立を守ろうとしてきたかを，具体的に展示しようとするところにあるといえるだろう。

しかし日本国内では，この施設は反日教育の殿堂と解される場合が多い様である。第三展示館は「日帝侵略館」であり，第四展示館は「三・一運動館」，そして第五展示館が「独立戦争館」で，その全てが日本軍

独立記念館第五展示館ホールの安重根銅像

安重根記念館前庭に立つ遺墨碑

南山中腹に建つ安重根銅像



独立記念館庭園に建つ安重根遺言の碑

国主義・日本帝国主義と対決した韓民族の姿をリアルに画きだすのが，その理由であるらしい。

予備知識なしに見学する日本人が非常なショックを受けるのは，第四展示館に特設され，三・一独立運動リーダーたちへの拷問を蝋人形によって再現するシーンである様だ。独立記念館といえば，この展示だけが日本に紹介され，一人歩きしてしまうのだが，冷静に見学すれば，拷問場面は全体からみれば，ごく一部にすぎないのである。

ところで，韓国統監府による韓国軍隊の解散がきっかけになって始まる義兵闘争をはじめ，社会の各層にわたった独立運動の歴史を展示する第五展示館では，入口ホールに安重根，金佐鎮（一八八九－一九三〇），尹奉吉（一九〇八－一九三二）の銅像をそれぞれ配している。この展示館では，当然ではあるが，金日成の存在は無視され，中国の間島を拠点とした抗日軍事行動が大々的に扱われている。

独立記念館の構内に建つ安重根遺言の碑

安重根による伊藤博文射殺にかかわる展示は，第三展示館の一隅に設けられていた。そこでは，ビデオを用いた映像資料が，くり返しくり返し伊藤博文射殺に至る経過を写しだしている。掲出された安重根の書は二葉で，第五展示館ホールの銅像台座に取り付けた銘板の書と同じ「國家危急勞心焦思」と，千葉十七の遺族が韓国に返還した「為國献身軍人本分」がそれらである。朴仁珏安重根義士記念館長によると，独立記念館展示のものはレプリカで，実物はソウルの記念館に収蔵してあるという。

第六展示館は，一九一九（大正八）年四月十三日に設立された臨時政府にかかわる展示で，太平洋戦争期に中国戦線で抗日軍事行動を実施した韓国光復軍，朝鮮義勇軍もその対象となっている。

この展示館の一隅に，ブックストアが特設され，各種書籍の展示即売が行われる。展示図録が二種類用意されるほか，韓国史に著名な人物を主題にした絵本もあるので，その中から安重根（안중근）を選びだして購入してみた。

巻頭には「安重根の生涯と足跡」と題する解説に加えて，独立記念館にある安義士の遺言の碑の写真が収められる。独立記念館の敷地内には，三十九基にものぼる愛国詩碑・語録碑があるけれども，そのひとつが安重根にかかわるのだろう。[13]

碑の文面は全文ハングルだが，その日本語訳は次の通りである。

－同胞に告ぐ－　　大韓帝国義勇軍参謀中将　安重根

私は，韓国に独立を取り戻し，東洋の平和を維持する為に，三年もの間，海外で野宿しながら奮闘してきたが，結局，目的を達しないままここで死ぬことになるであろう。わが国二千万の兄弟姉妹たちよ！　みずから奮起して学問に力を入れよ！　産業を興せ！　そして私の意志を受け継ぎ，自主独立を回復せよ！　そうするならば，私は死んでも何ら心残りはないであろう。

一九一〇年二月十五日

（趙珍淑訳）

国際色豊かな第十四回追悼法要

一九九四年九月四日，東北新幹線くりこま高原駅で待ち合せた中川と趙は，タクシーで大林寺に向った。大林寺住職からこの日に，安重

根・千葉十七の第十四回合同法要を行うから参加しないかとの案内を受けていたからである。第十二回法要には，前述の様に安重根の孫にあたる黄恩珠さんと縁続きの安椿生氏（独立記念館前館長）が参加されたが，今回は韓国から多数の方が来られるとのことであった。

法要には，趙の留学生仲間で北海道教育大学で研修中の現職教員柳英淑さんも参加した。大林寺に着いてみると，緑色のチマ（袴）に白色のチョゴリ（上衣）で装った中年の韓国人女性で組織するオモニ（母親）合唱団が参会し，鎮魂の歌声をたむける用意が整っていた。

法要は，大林寺住職を導師として行われたけれど，韓国慶北慶山郡互村面大閑洞の大幹仏教禅教宗八公山薬師庵の尼僧張永順住職が，『わが心の安重根－千葉十七・合掌の生涯』を韓国語訳されて出版直後の来日ともうかがった。一九二七年に日本で生まれ，広島高等女学校の卒業で，日本語の会話もたくみな方である。

本堂での法要後，参道脇の顕彰碑に，参会者一人一人が献花あるいは焼香を行った。千葉十七夫妻の墓にも，多くの人が香を捧げ，日韓交流の実をあげる意義ある会となったわけである。

その後，本堂を会場にして懇談会がもたれ，来賓として出席された仙台駐在の韓国総領事，安重根義士記念館館長のあいさつがあった。韓国側からは，明治の元勲を殺害したテロリストとみられることの多い安重根の行動に深い理解を払ってきた日本人関係者に対する感謝の気持が述べられている。地元からも多数の参加があり，安重根再評価が，地域ぐるみでなされている状況を，感じとれた。

九月上旬に法要が行われるのは，この月に安重根が誕生しているのに加え，稲刈り前で農閑の時期に相当するのが理由であるという。ちなみに安重根の処刑は，明治四十三（一九一〇）年三月二十六日，千葉十七は，昭和九（一九三四）年十二月十七日死去と記録されている。

安重根の行動をどう受けとめるか

教員養成学部で中等社会科教育法，地理歴史科教育法を講じてきた中川にとっては，安重根の行動をどう評価するかは，頭をなやませる問題であり続けた。

「朝日」一九七九年九月十日付の記事を文書資料にして，伊藤博文を射殺し，日本では殺人犯，テロリストの扱いを通常うける安重根が韓国では愛国の義士，壬辰倭乱（文禄の役）で豊臣方水軍を撃破した李舜臣，三・一独立運動（万才事件）のヒロインで韓国のジャンヌ・ダルクに擬せられる柳寛順ともども，三人の英雄にされていると説明すると，驚きの感情を示すものが多かった。

それに対して，日本でもテロが正義視された事例があるではないかと話してみるわけである。蘇我入鹿を謀殺し，大化改新を成就させた中大兄皇子と中臣鎌足をテロリストと評する日本人はまずおらず，二人は近江神宮，談山神社の祭神となっているのに気をつけようとも言及した。赤穂義士の吉良上野介殺害は，集団テロの極致だが，これを義挙とみる日本人は，いまでも多い筈である。

とはいえ，安重根の行為はやはりテロなのであり，第二次日韓協約を強要して外交権を奪い，さらに韓国統監として韓国軍を解散させ，内政権をも事実上接収して，亡国の途を強要した伊藤博文は，韓民族のうらみを背おって殺害されても仕方ない存在と，かつては解せざるを得なかった。つまり，安重根の行動は，身を殺して仁をなしたがゆえに，義士とみたてられると考えたわけである。

安重根はテロリストではなく，義兵の将軍として宣戦した日本を対象に戦闘行動を行い，その結果として伊藤博文を殺したのであり，戦争での殺人は合法で犯罪ではないとする「砲殺」説を，韓国側が公式

には表明していると知ったときには，矢張り驚きを禁じえなかった。

安重根が裁判において，自分は殺人犯ではなく，戦闘行動中に捕虜となったに過ぎないと述べたといわれることも，韓国側の見解を支える根拠になっているのだろう。だがそのことを紹介しても，日本人学生の多くは納得してはいない様に思われる。

以上の見方にたてば，安重根による伊藤博文射殺は目的であったことになるわけである。けれども，すでに韓国廃滅を取り決めていた日本帝国政府は，伊藤博文の死によって既定の方針を変更することなく併合を強行している。元勲一人を殺して，併合を阻止できる様な情勢ではなかったのを，安重根は知らなかったのだろうか。

いやそうではなく，伊藤博文射殺は手段なのであり，その動機を裁判の過程で堂々と開陳する行動を介して，日本帝国主義の非道を日本国民に，ひいては国際世論に訴える狙いが安重根にはあったと見立てることにより，安重根に心ひかれた千葉十七の後半生も，理解できる様に思えるのである。

注

(1) 東京教育大学附属中学校に勤務することになった昭和三十三年度以来，今日まで絶えることなく実施してきた文書資料を教材にして実施する社会科学習，社会科教育法講義で，最初に作成した文書資料は，「朝鮮　学習のための資料」(中質紙二つおりで計八ページ)であった。その二枚目(三ページ)の筆頭に収めたのは，金達寿『朝鮮』(一九五八年・岩波新書)から引用した三・一独立運動への言及であった。

(2) 井上・江坂・山口・李『韓国の歴史散歩』(一九九一年・山川出版社)三七ページ。

(3) 金達寿・姜在彦・李進熙・李徳相『教科書に書かれた朝鮮』(昭和五十四年・講談社)巻末に収められた執筆者紹介の略歴による。李進熙(イ・ジンヒ)は，明治大学大学院(考古学専攻)修士課程を経て東京朝鮮高校・朝鮮大学校教員になったと紹介されている。

(4) 『韓国の歴史散歩』は，“単なるテロリストではなく，高い士操をもった愛国者”と記述する。文章の読み方にもよるだろうが，単純な(盲目的な)テロリストではなかったと解し，狙撃それ自体は，テロ行為と認めている様にもみてとれる。

(5) 「暗殺」と記載したのは，清水書院，中教出版，帝国書院であり，「射殺」と表現したのは，日本書籍，教育出版，大阪書籍の各三社である。言及個処は，本文，注記でのいずれかとなっている。

(6) 一九九四年一月十七日付「韓国から宮城の寺へ四一人が“秘史”ツアー安重根に心動かされた憲兵がいた」，一九九四年二月二十七日「獄中の義士に敬服した日本兵の心―わが心の安重根・千葉十七合掌の生涯」読書欄掲載の書評。

(7) この記事の見出しは，「伊藤博文を射殺　安重根の孫らが元憲兵の墓参り」となっている。

(8) 一九九三年一月十七日付の紙面に掲載されている。

(9) 読む者に切々と訴えるところのある名文だが，僅かではあるが事実の誤認と書き落した事実のあるのがくやまれる。

安重根が収容された旅順監獄は，ポーツマス条約によってロシア帝国から引き継いだ遼東半島先端の租借地を統轄する関東都督府である。韓国併合前であるから，朝鮮総督府は存在していない。

遺墨返還のいきさつは，「朝日」一九七九年十二月十二日付紙面に詳しく報じられているけれども，千葉十七の死後，遺墨が直ちに姪(三浦くに

子）に受け継がれたのではなく，未亡人が長く保管し続けた。そのことを祈念して，大林寺本堂に設けられた遺墨（複製）祭壇には，千葉十七未亡人の遺影も掲げられている。

安重根義士崇徳館とあるのは，社団法人安重根義士崇慕会安重根義士紀年館が正称である。

(10) 韓国教育開発院『日本教科書にでてくる韓国史の内容の検討』（一九八七年）韓国教育開発院。

(11) このときの体験を，大林寺を会場にして開かれた第十四回安重根・千葉十七合同記念法要に参加された朴仁珏安重根義士記念館長（第三代）に話したところ，韓国でも最近は若い人たちで安重根に関心を払う人がだんだんに少なくなり，憂慮しているところです。不用意に「暗殺」という表現をしたのでしょうが，ご指摘の通り韓国人の使うべき用語ではありません。そのことを，日本人から指摘して下さったことに感謝しますと，堅く手を握って表明されたのが，印象に強く残っている。

(12) 独立記念館開設については，それ以前にもいろいろ計画はあったけれど機が熟さなかった。そうした状況の中での教科書問題が起爆剤の役割を果たしたと，『独立記念館』案内パンフレット（日本語版）に収められる「建設背景及目的」は説明する。

(13) 碑の数は，案内パンフレット『独立記念館』収載の「独立記念館の案内図」によって調べてみた。

「安重根の生涯と足跡」には，次の様に記されている。

独立運動家の安重根義士は，一八七九年黄海道海州府広石洞で生れた。幼名を應七と言い，学問より武術の稽古に熱中した。十七才の時，フランスのボン神父に出会い，新しい学問を学んだ。一九〇五年，乙己保護協約が締結されると，三興学校と敦義学校を作ったが，その後，教育だけでは国運を立て直すことはできないと判断し，一九〇七年，ウラジボストクに亡命，大韓義勇軍の参謀中将となった。一九〇九年，十一名の同志とともに指を切り，命を賭けて国の独立を取り戻すことを誓い，結社隊を組織した。

同年十月二十六日，韓日合邦の元凶である前韓国統監としての伊藤博文をハルビン駅で射殺，即刻逮捕されて死刑判決を受け，翌年三十二才で殉国した。

彼は書道にも優れ，獄中で「東洋平和論」を書いた。一九六二年，大韓民国建国功労勲章が授与されている。（趙珍淑訳）

（＊・茨城大学教育学部社会科教育講座）
（＊＊・茨城大学教育学部学校教育講座・現職教員派遣留学生＝大韓民国京幾道安養市安養国民学校教師）

（一九九四年十月十二日受理）